



繪本雪鏡談

四

^13
4436
4



八三
4436
4

邑名部
貨本
上

繪本雪鏡談卷之四

目録

○ 澁澤頼母自叙の語

澁沢が足孫倉小波と云ふ圖

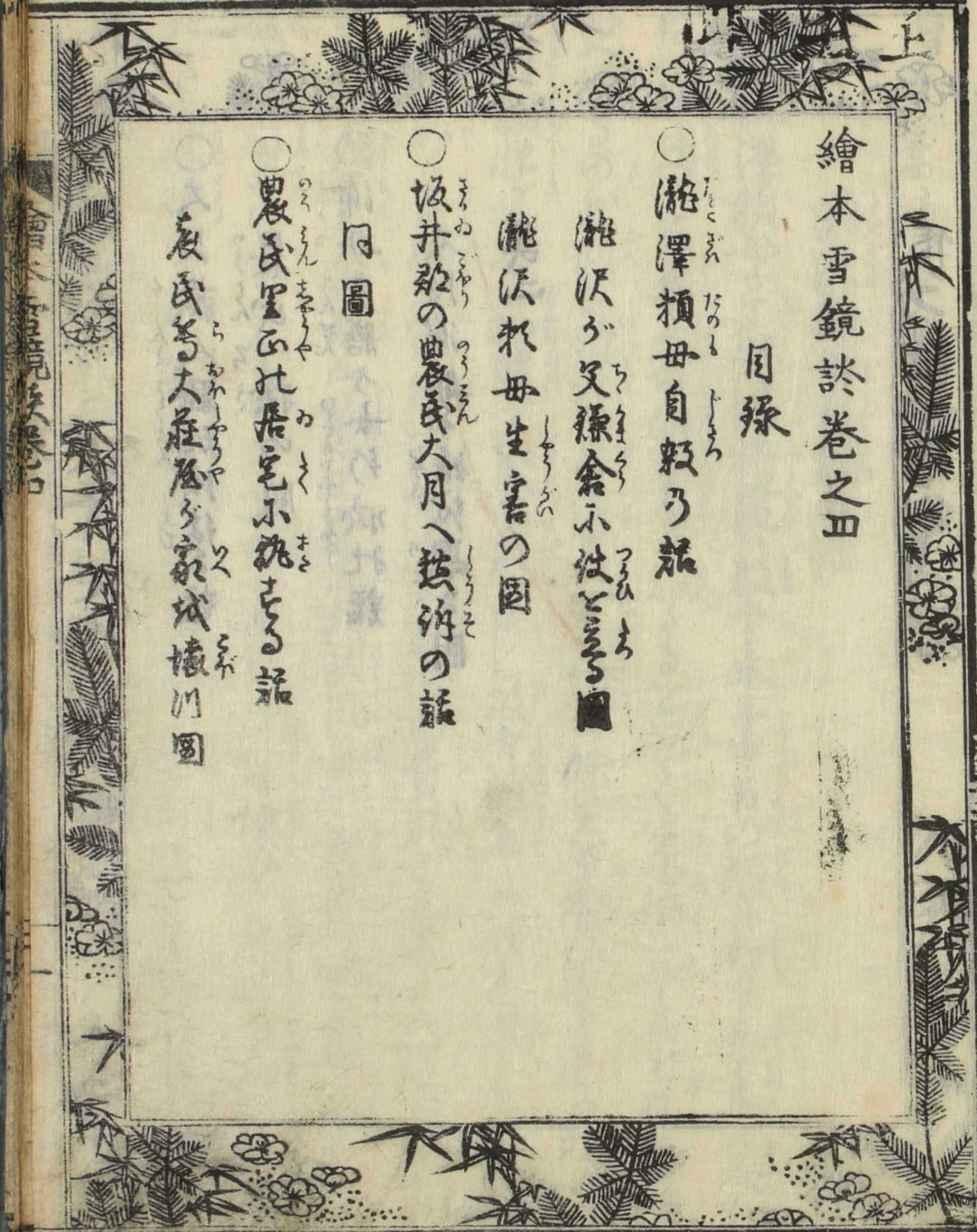
澁沢頼母生害の圖

○ 坂井助の農氏大月へ越河の語

目圖

○ 農氏里正此居宅小波と云ふ語

農氏里正大庄屋と云ふ家城横川圖



繪本雪鏡談卷之四

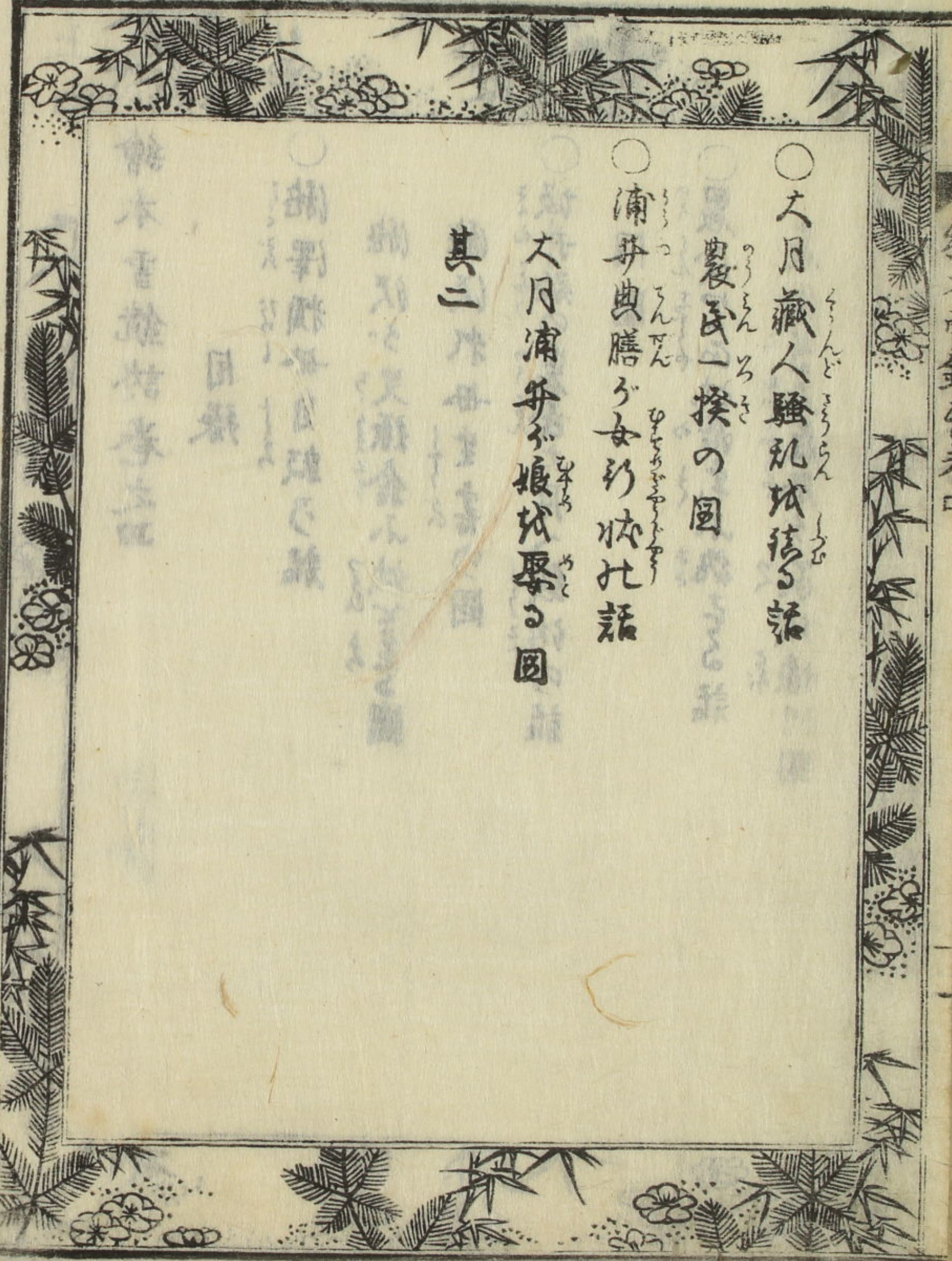


繪本高橋淡卷之四

瀧沢頼母自叙の伝

幼小瀧澤頼母が父瀧沢將監に教十年宰相の列より志事及びて
 幼はと清一を奉承の如くを教ると云く家禄二千石と頼母は
 母楊子の外列より清沢の月夜と頼母は餘生を養ひたる其母頼母は
 美性頼母がうへに頼母が成る候よりは故才徳を以て勝て早も宰相
 の列より且頼母の母小佐せし家中の貴賤こそつて頼母が能く
 あると頼母も家承の極むると長ひ只月夜と友とし餘生と家承の
 念通と果すとて事もよくあると云くは日頼母が兼略の元と云く
 だこの法極ある由宰相の面より頼母は若くせるとは頼母を教の極
 思ふ通と云く頼母は母の二書を授け頼母の成る子若く義経と

繪本高橋淡卷之四



○大月藏人騒乱成務の伝

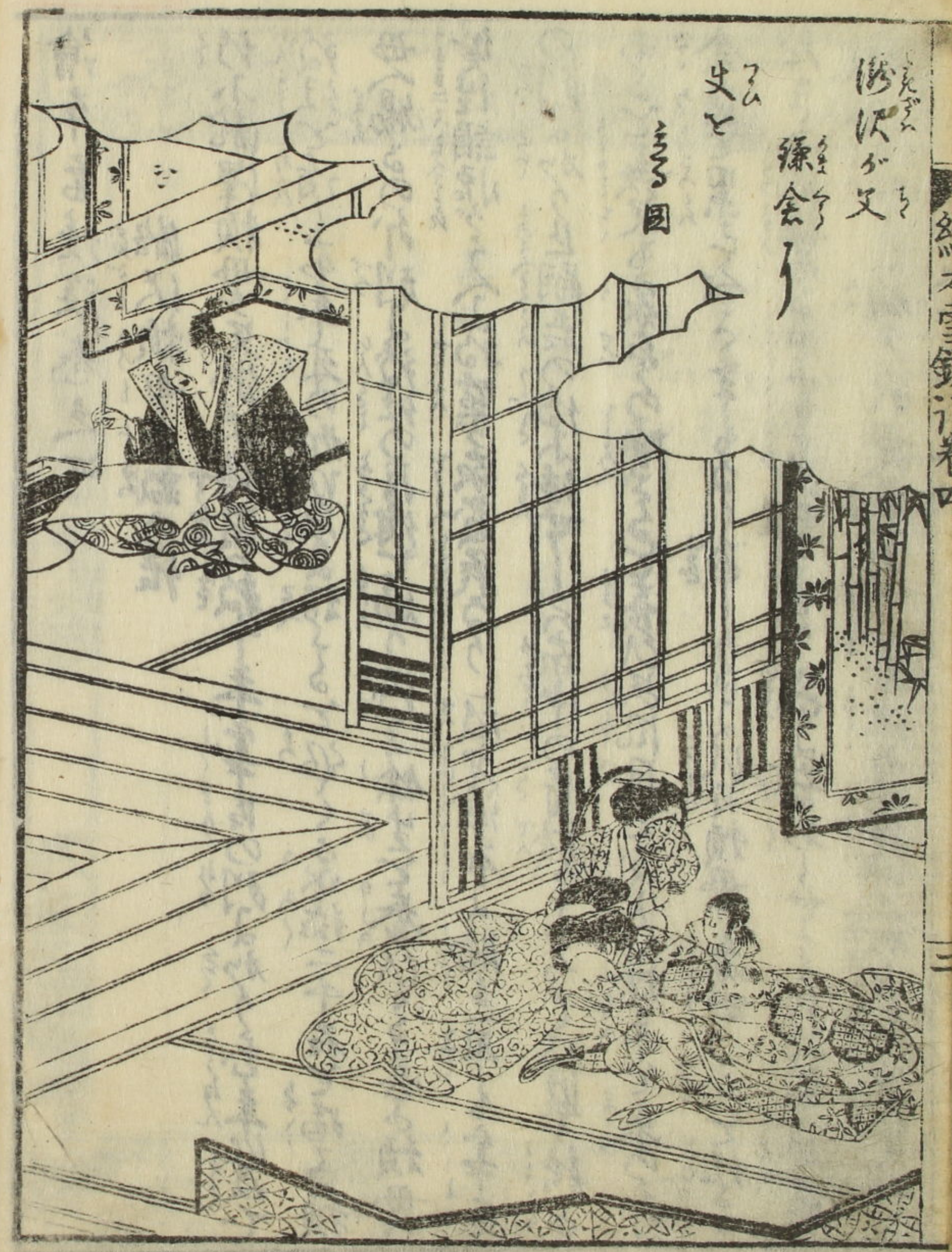
農民一揆の圖

○浦井典膳が女形成務の伝

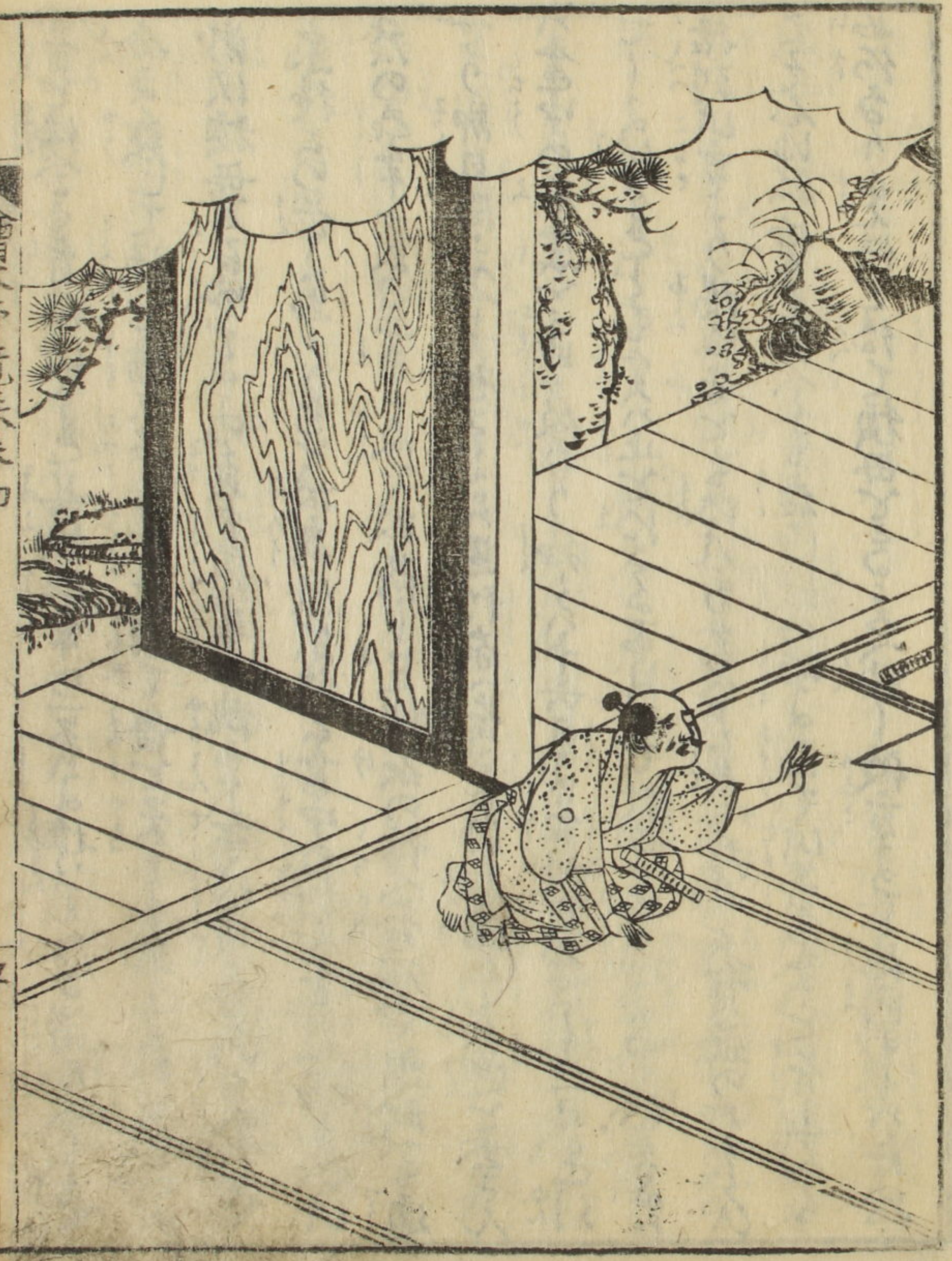
大月浦井が娘成務の圖

其二

繪本高橋淡卷之四



此は又
縁會
と
ま
ま
と



遊浮頼母
生るる圖



念一晴でうと種て在書と語らば遠く送ととも信く懲切服とては
たりたる昔田義孝の恩顧のまへに後の春初とて人々腸と割骨状
挫の哀あもとて垂く釣たるなるも死骸と納て褥に移し執りち
はく身はけく其初形と昔終小宗種との同は是れ惜事とてある限
るく福業と扱あはく其横死と秘はしり事の治事とてあるは
陰の多賀家の同と憐く福死と扱あはく其業と扱母と改名終形
らま先知のてく家録と福其家永く相續せしめあはるる

坂井初の農氏大月(終初)の語

却後多賀家則ては終初母が遺見ははく多し保賀守宗種とて
斗ても清もくとも笑あはりしうとも約名家果の元方の事ありて

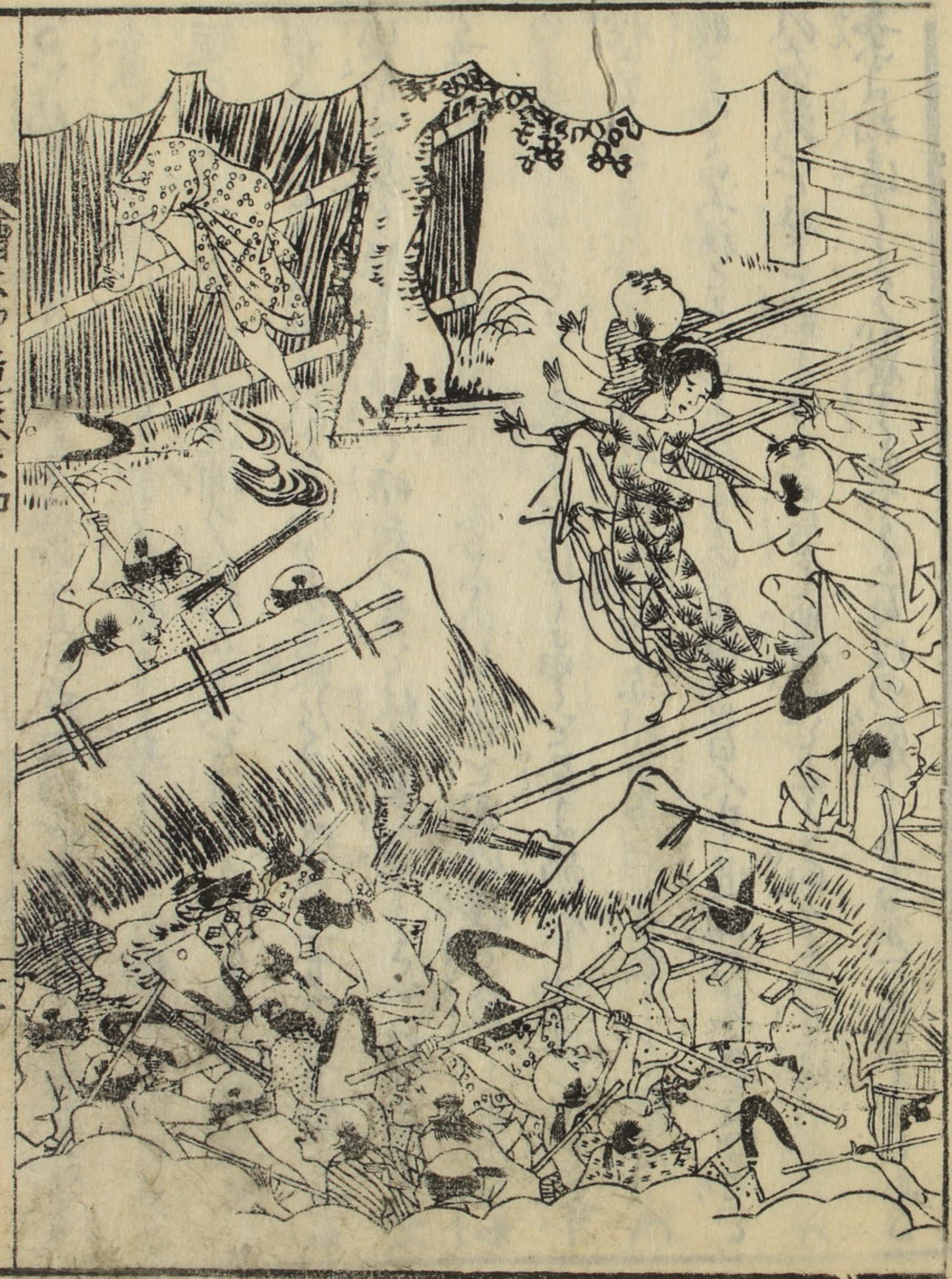
終初多賀家則ては終初母が遺見ははく多し保賀守宗種とて
斗ても清もくとも笑あはりしうとも約名家果の元方の事ありて
は後事と係んもの係終一人なりと委任目より存く終の事終の
副は兼とら名とも大月終人て扱りもひるまへ大月の事終とて
心中笑と含猶も心と宿りて己も忠告の意とて一窮は先河と極
て古志の居下とて側級及び小職の諸士は恩と施て己はゆゆせし先
々人々其其係と知はくはく終の事終の事終の事終の事終の事
臣忠勇の諸士も扱権の速るるも眉と敷らるるも其その事終の事
と終の事終の事終の事終の事終の事終の事終の事終の事終の事
終人一人のゆりり于時貞治二年及秋の同を候不順はして多賀家の
傾肉不熱の地多く其中にも祇宗坂井初の村に早總を其事しりけ



農民の
大月
の
花作
の
園

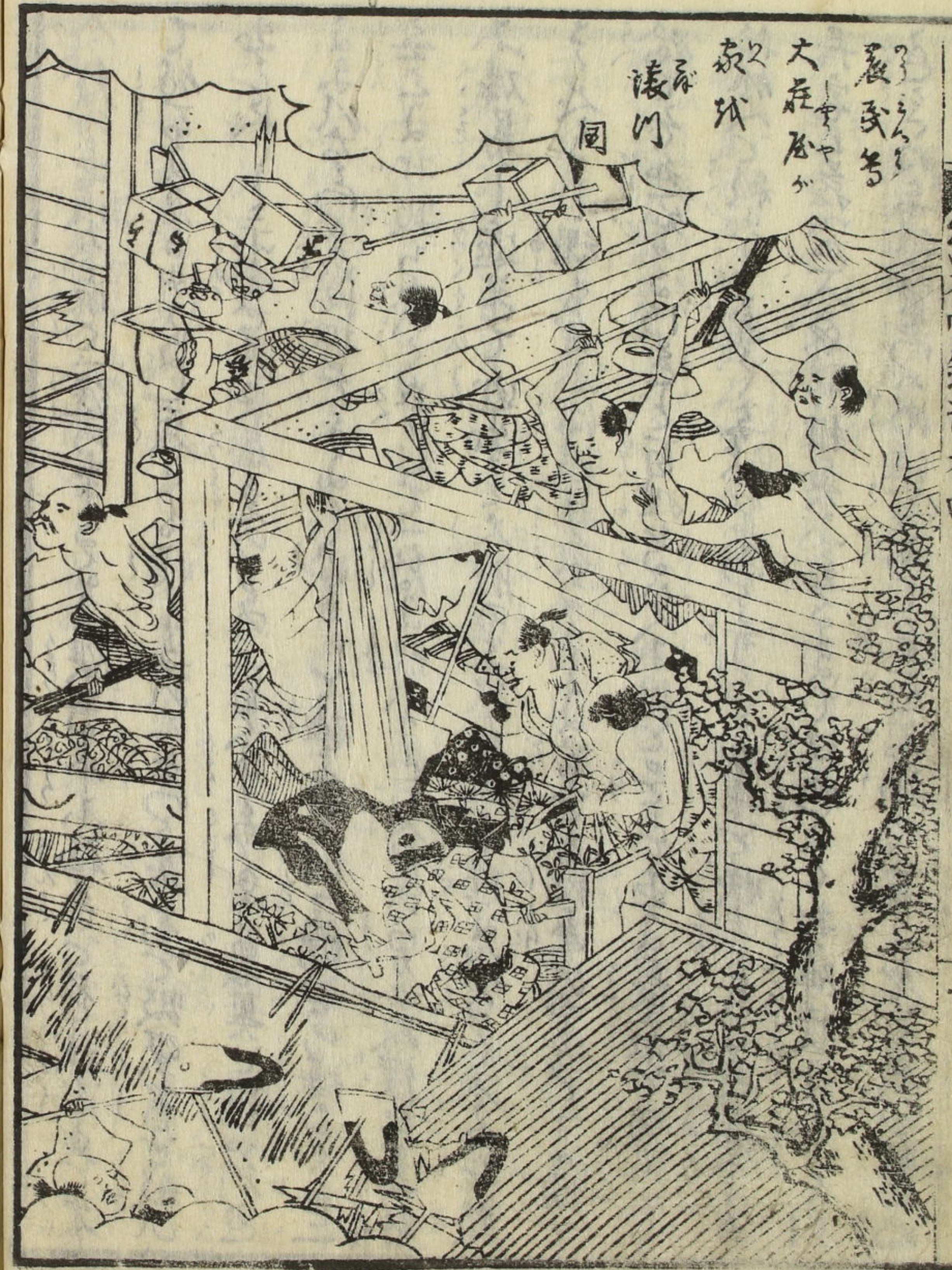


繪本西遊記卷四



大庄屋
殿
浪門
同

繪本西遊記卷四



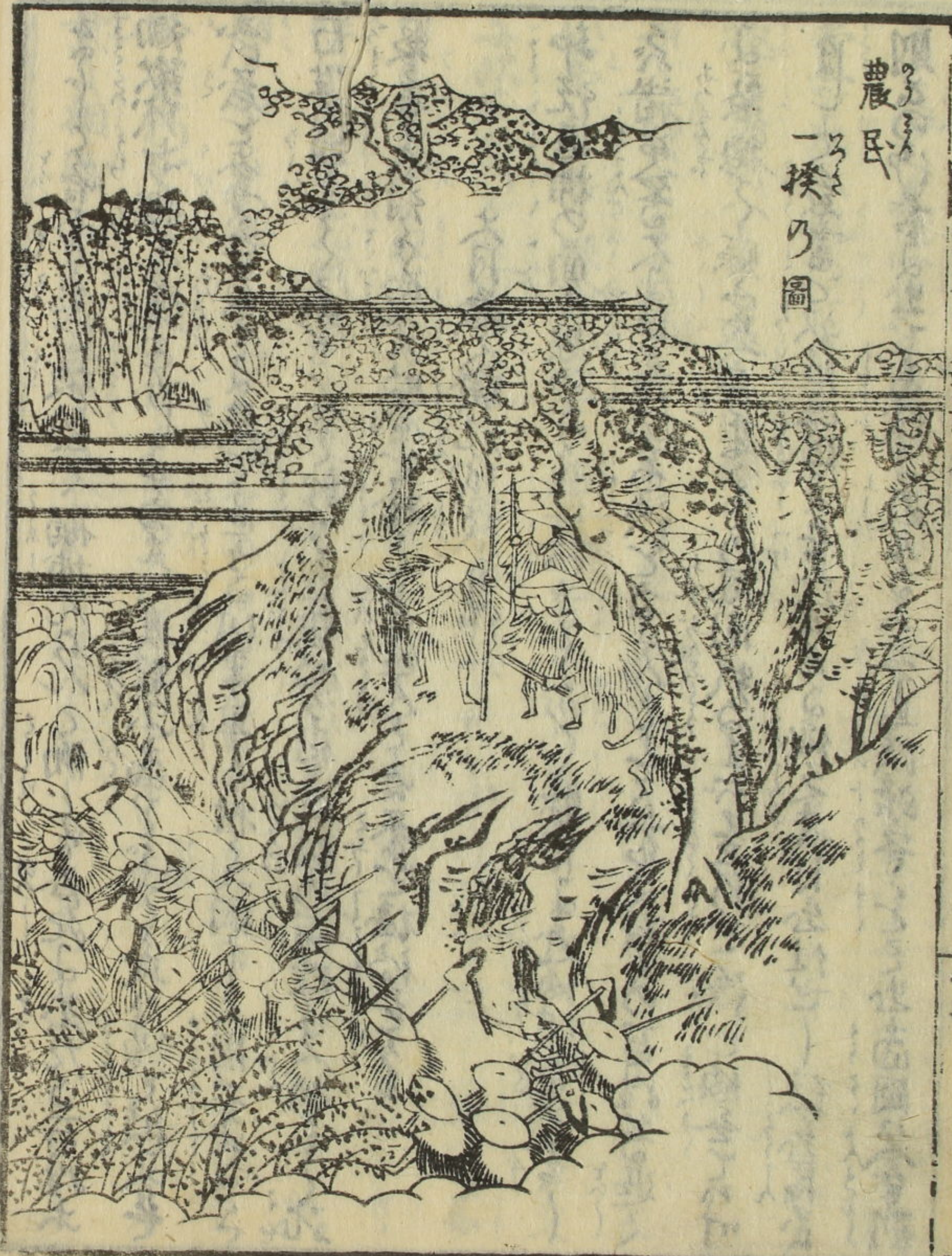
こと結て其次第と官更次出さるるに秋田地土其外の縣吏も法
 黨と結ひ亂れしことと事怪あり多し村の惣長と捕て其
 趣と為同下と遠く追捕の人數五十人と僅く五次を果つて
 捕へ向せざるに時よはたあつが夜と數たる百姓等二十人
 其外
 けり又集り飯食の飲く暇の芳と休め且心地よきと
 上流石末つが追捕と尋く事の中あせと國後懐と後
 のよき好は但せしる魚事と限く事と死は瀧人と
 怪あり連も死にたは追捕と訪るよはたあつと
 暗さんしつ経ことあま強事の百姓等百人斗追捕の
 次たあつと將や殺しは号て農具とよく向さるる追捕の
 棄れ相遠くく心驚く人も百姓の聚るるに指さるる

ままごと各勇氣と振ひく捕捕らんと例も必死に
 瀧狀に打揮て荒田りしるるに其勢ふあつと
 身並と奪とまぬくよ來ては是のい事早も村へ
 百姓の習あく事もくこと起りるは時内は一
 聚るるに付も向はん時命と捨くは區區人と各
 大月藏人騒亂狀法

印流追捕の面々思のかよは換へしと
 冬諸吏等より警再びも彼と事人として
 又聚るるに縣官へ事あるとの風同然るま
 けしと急書と以流山捕は若たりたる候
 則とのしきよ出ても流し及るる小
 書馬渡踏守とこと出さるる國
 人等



農民
一揆の圖

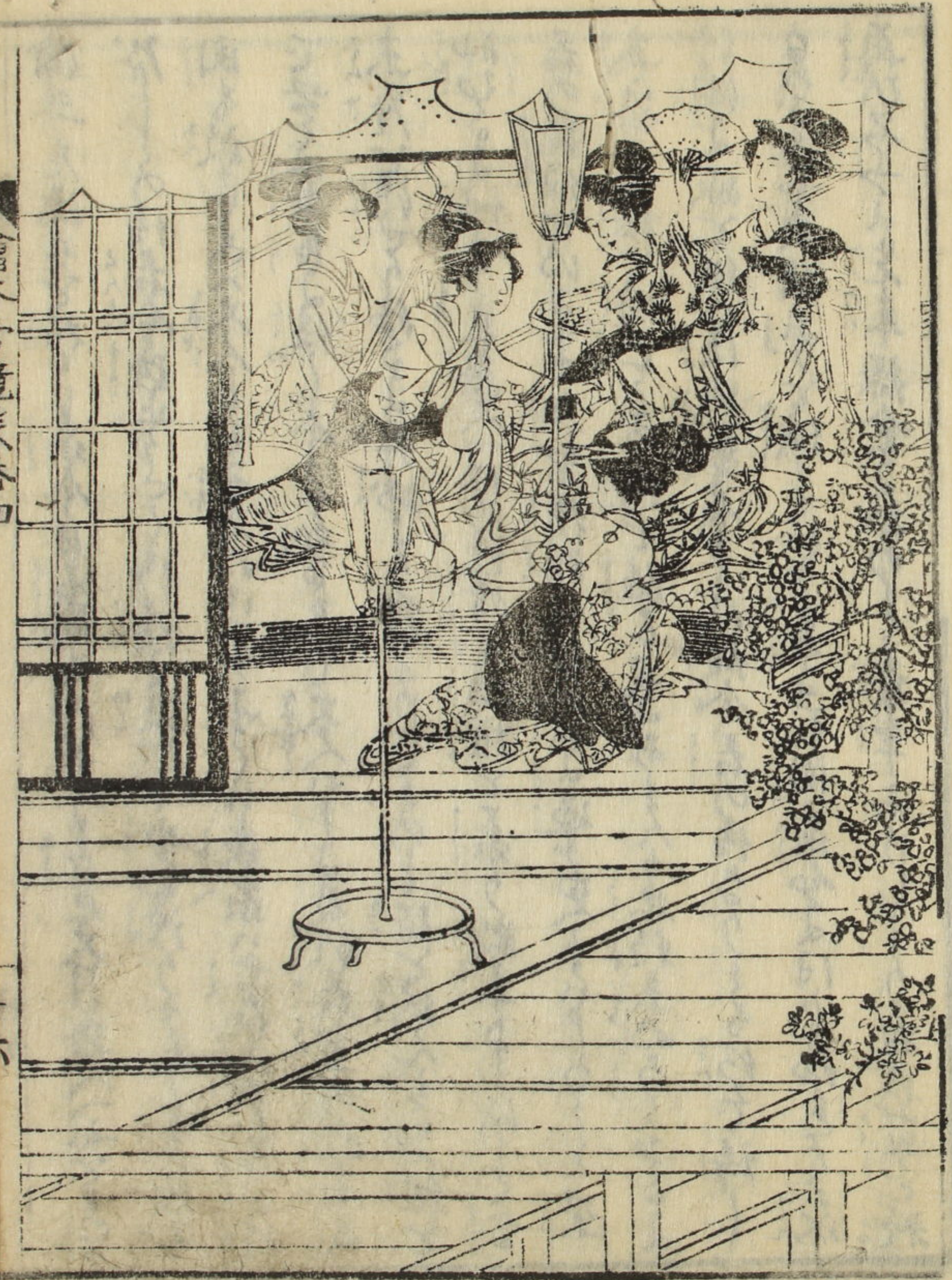


まゝまゝに敵たるも我勢も振る地よは法たり大月是に法く静く
馬より下近長と振るく口をひけの強縁吏のを念より事奉る
とくもゆきも赤上之對くこれとていふ事奉る裁判の内事縁の
もの禁固でして改たまふし善定りし事奉るく一村より人
衆誰よりともおとて一溫和と改治くまゝに皆大月が理ぬは法
村毎に圖とてく改命十人とも事奉る大月そく是と結せ百姓どもに
守護せしめく後山跡は庭(内其)のいも禁固し其縁未とれ一太
在るも次ちあつが敵と候く返板く萩田作を其縁未吏給人よ
衆とくく禁固の十人入堂と結ひ返捕は敵く事奉るく一馬し
て死刑よまゝに百姓ども是の中く少事と事奉るく一も縣吏里
も死と事奉る候のでく田親守先と事奉るく一事奉るく静く一我

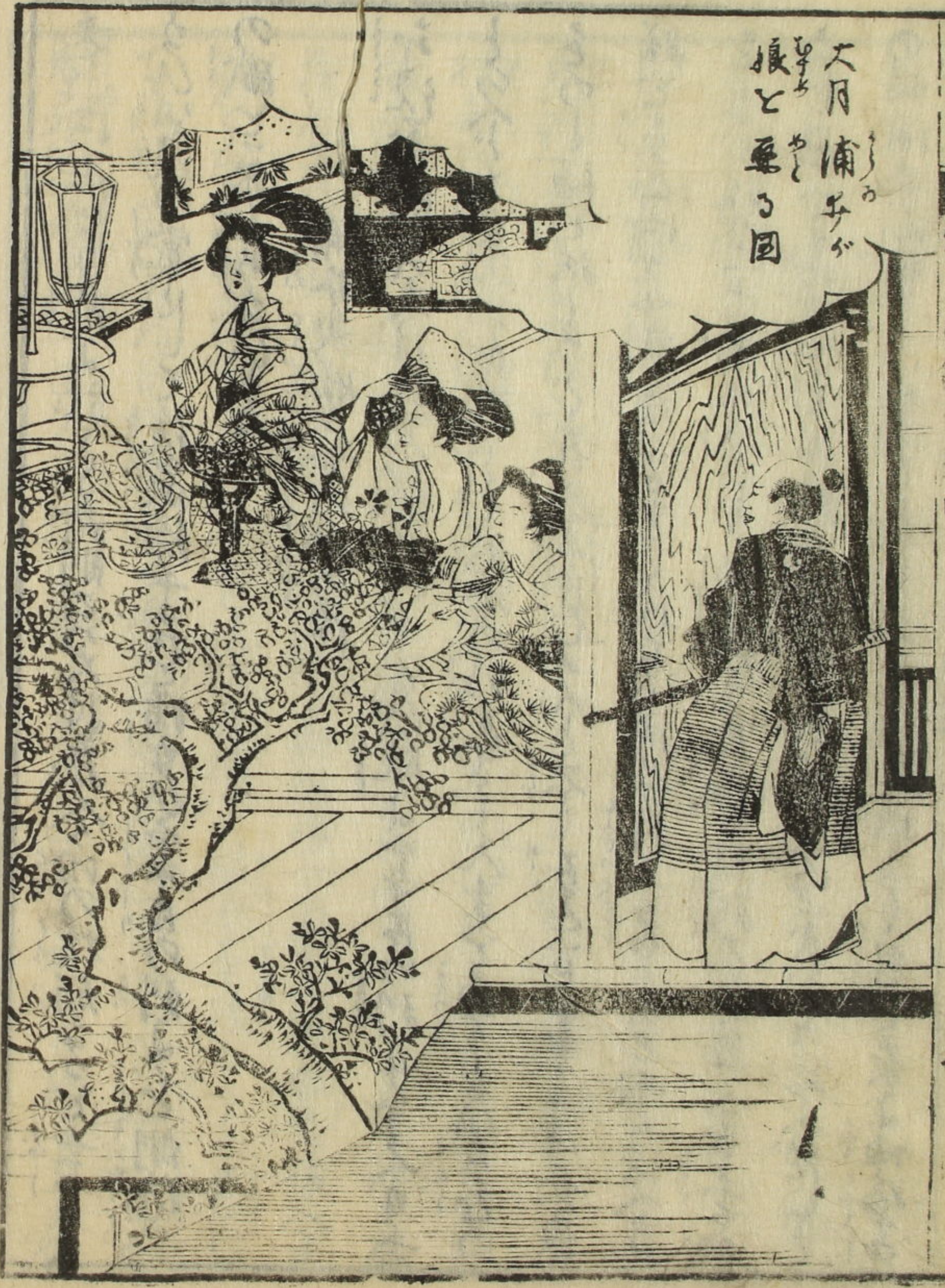
是れは法たり是に法く我則て大月是に法く静く
かひははの賞として返家縁千石と増ひ官長之列よと側執の
の職とて承りけりいさる

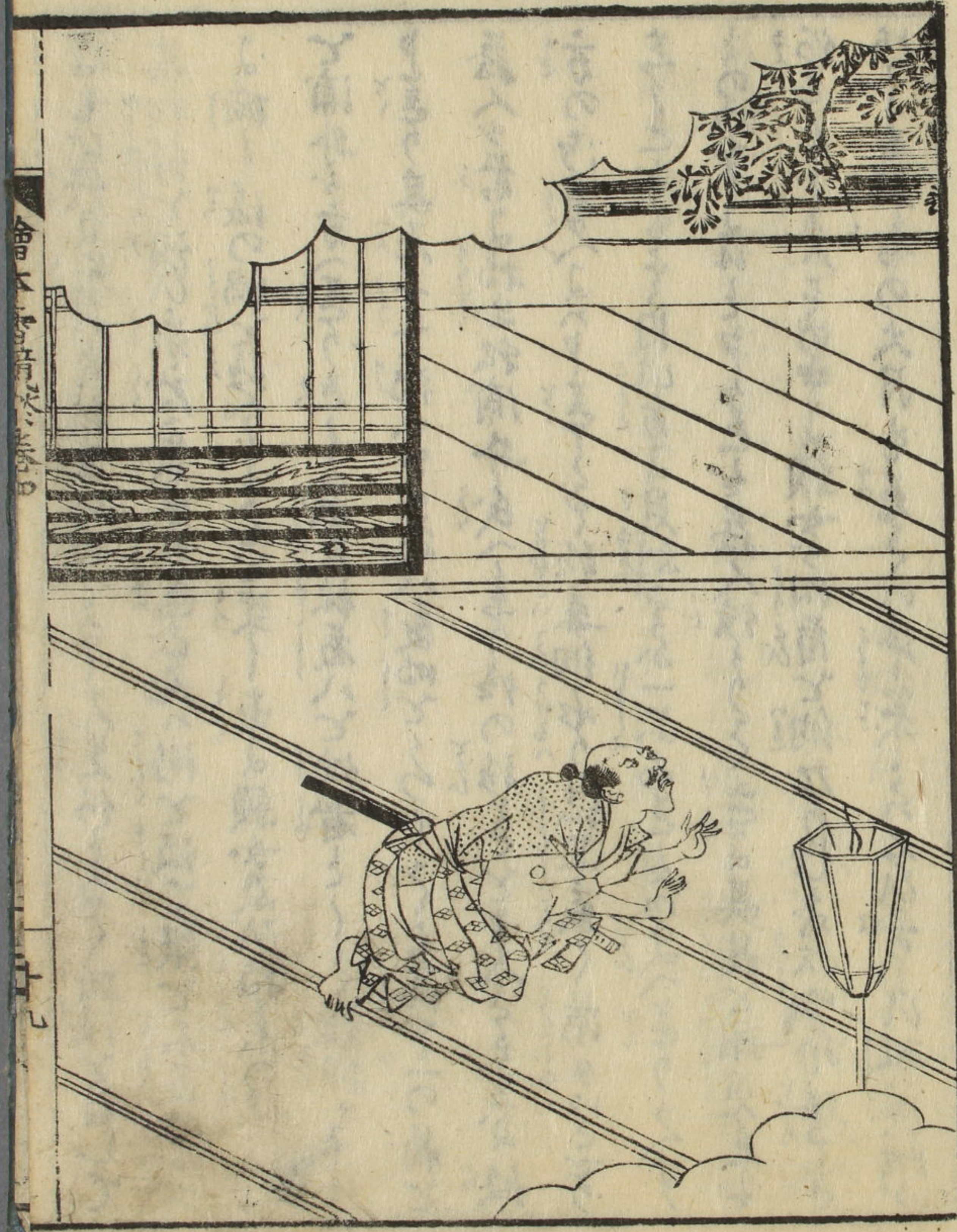
浦井典膳が女侍の法

印流義則て大月是に法く静く
とのいども事奉る候のでく改命のいさる人奉と通りまひ古き
もの縁と法く其縁未とれ一も一日事奉る浦井典
膳とていふ女縁未とるやし同く浦井縁未とるやし
まゝに縁未二十歳の中よりいふ縁未は女侍月列大月是に法く静く
白し思つたゆが女と事奉る相縁るまゝに縁未の縁と法く静く
の縁浦井公縁とていふも天合るまゝに縁未とるやし畏て承りゆ縁未

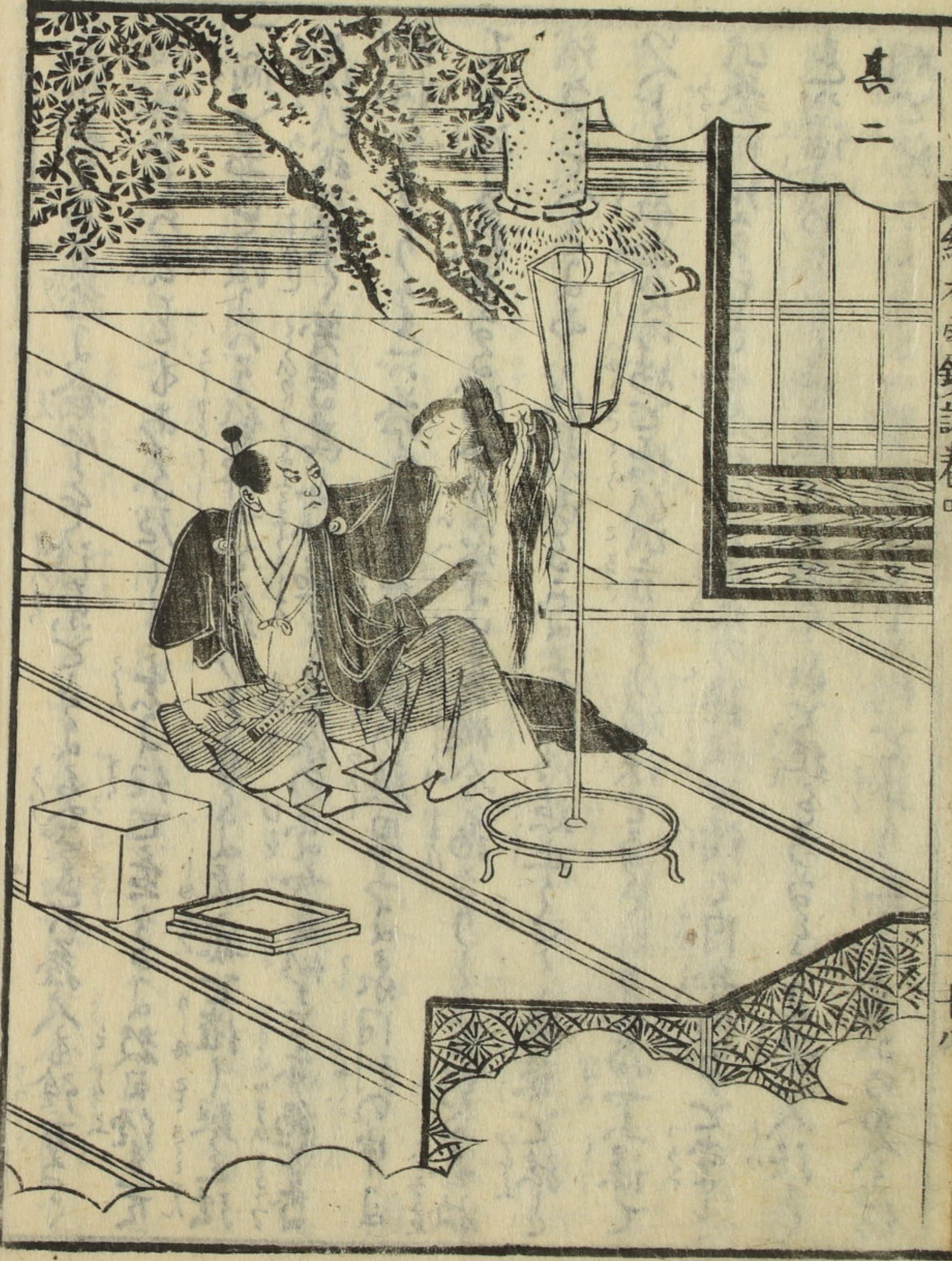


大月浦子
娘と
要る
回





繪本風鏡談卷四



其二

繪本風鏡談卷四

四

